

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

- 2 ミュージアムの収蔵品57
『作業日誌』

巻頭
つれづれ

- 3 福島の2歳児が「人生初散歩」
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

- 5 移行期の激変と平和研究拠点形成
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐〕

ここが
見どころ

- 7 被爆死した父の形見、ベルトの留め金と『消えた広島 ある一家の体験』
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

- 8 オリバー・ストーン、ピーター・カズニック 著 大田直子 ほか 訳
『2つの世界大戦と原爆投下』（早川書房 2013年4月刊）
（『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』第1巻）
立命館大学国際平和ミュージアム 専門委員
藤岡 惇〔立命館大学経済学部教授〕

ミニ企画展

- 9 開催報告（2013年7月～10月）

事業報告

- 10 ●ロビー展示「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」
●モノが語る戦争の記憶
●2013年度 博物館実習受け入れ
●小中学校教員下見見学会2013
●インターンシップ受け入れ
●立命館土曜講座 2013年8月
●学生ミュージアムスタッフ 学習会
●第12回附属校平和教育研究会
●チャレンジ体験受け入れ
●ボランティアガイド学習交流会
- 16 ●日本平和博物館会議加盟館の紹介・第8回 埼玉ピースミュージアム 埼玉県平和資料館
●ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 足立 恭子
●平和へのメッセージ
●2013年度入館者状況（2013年4月～10月）、編集後記
●ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE立命館大学
国際平和ミュージアムKyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『作業日誌』



特攻隊員として出撃前の岩井氏

作業日誌

1944（昭和19）年2月14日～6月20日

この資料は、1944（昭和19）年2月から6月にかけて、海軍の予備学生が記した日誌です。劣化が速く長期保存の難しい酸性紙で、特に資源が乏しい時代の資料であり、すでにかなりもろくなっています。

日誌を記した岩井忠熊氏は1922（大正11）年生まれで、当時21歳でした。岩井氏は1943（昭和18）年に京都帝国大学文学部に進学しましたが、徴兵猶予が停止され（学徒出陣）、12月に横須賀第二海兵団に入団し、翌年2月に武山海兵団の学生隊に採用となりました。

基礎教育期間に書かれたこの日誌からは、大学生が軍人に仕立て上げられていった状況をいま見ることができます。

日誌の事項は、日課、注意された事項、反省事項、その週の総括的所感です。欄外には上官による検閲印やコメントもみられます。

日課は、「航海」「気象学」「機雷」「短艇」といった教科、「防空訓練」「大掃除」「定時点検」などの行事、「軍歌」や「勅諭奉誦」といった精神教育など、カリキュラムの概要が見えます。5月には試験や、死者も出した「武装競歩競技」の記載もあります。

注意された事項は「起床動作不敏活ナリ」「帽ノ被リ方」「水道コックノ締メ方」「男ラシクアレ」などとあり、所作振る舞いから思考まで絶えず監視され統制されていたことがわかります。教科よりもこうした注意が多く記されており、その徹底こそ基礎教育の主眼であったことがわかります。反省事項には「学生隊編入以来一ヶ月余、未ダカクノ如シ。誠ニ恥ツカシキ思ヒス。今後一層戒メントス」などと記されています。

2月14日の週の総括的所感には、注意や鉄拳制裁に対し、「鉄拳制裁ヲ敢テ苦ニセザルノ境地ヲ以テ始メテ真ニ自己ノ責任ニ於テ行動シ得ルモノト思考ス」とあります。「軍隊」では、鉄拳制裁（拳骨で殴る罰）は日常で

した。一度に何十人も制裁する時は前後列に並ばせ、向かい合った相手を殴らせ、手加減した者だけ上官が自ら殴りました。所感にはそれを苦にせずとあります。

昨年、当館は日誌が書かれた当時の体験を聞き取りました。その中で岩井氏は当時の心境を語っています。

毎日のように、日常的にそれ（鉄拳制裁）があるんだから、嫌になっちゃうわけだね、本当言うところ、でも、それを偽って、さもしっかり頑張っていると言わんばかりの文章を書かなきゃいけないんですね。で、書かせる方は、それを書いたことで満足するんですね。

暴力の苦痛と屈辱から少しでも身を守ろうと、要求に徹する中で学生達は少しずつその行動や思考を内面化したり、習性にしていきました。

戦後すぐに復学し、その後日本近代史の研究者となり、現在は立命館大学文学部名誉教授でもある岩井氏は、この日誌には、そうして人間を軍人の型にはめる教育の様子が現れており、自らもまたその産物であったと証言の中で過去を直視しています。

海軍というのは教育の中でね、型にはまった人間を作ることを目標にしていたと。僕はその通りだという印象を持つんですね。だから、その基準に達する人間の目標みたいなものは、あの日誌を見ているとちゃんと出ているわけね。だから、僕もそういう意味ではそういう目標に向かって作り上げられたと言う側面を否定できないんですね。

学生隊での教育を経て、やがて岩井氏は「震洋」特別攻撃隊員となりました。体験をまとめた著書の中で、岩井氏はかつての戦友の死を悼み、彼らの苦悩に共感しながらも、しかし、「私たちがいま五七年前のその場所にとどまっているとしたら、戦後の長い時間を何の進歩もないまま怠惰な思想的営みをしてきたことになるだろう」として、国家の問題を問い、学徒兵たちもまたアジアの人民の殺戮に加担していた事実を直視する責任があると著しています。

* 岩井氏の証言は、常設展示にて「モノが語る戦争の記憶」（映像コンテンツ）として公開しました。詳しくは本号10頁をご覧ください。

（学芸員 兼清順子）

引用文献

岩井忠正・岩井忠熊著『特攻：自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』（2002年、新日本出版社）

福島の2歳児が「人生初散歩」

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ やなせたかしさん逝去

『アンパンマン』の生みの親であるマンガ家のやなせたかしさんが亡くなりました。94歳でした。

私は、やなせさんが作詞した「手のひらに太陽を」という歌が好きです。

「**僕らはみんな生きている／生きているから笑うんだ／僕らはみんな生きている／生きているからうれしいんだ／手のひらを太陽にすかしてみれば／真っ赤に流れる僕の血潮／トンボだってカエルだってミツバチだって／みんなみんな生きているんだともだちなんだ**」

この世に生をうけた私たちは、この歌のように、明るく、元気に、トンボやカエルやミツバチとも戯れながら、楽しく生きたいものです。

でも、私が毎月通っている福島では、せつかくすばらしい自然があるのに、放射能という目に見えない「悪魔」に災いされて、子どもたちがなかなかトンボやカエルと戯れながら、自由に野原を走り回ったり、ゴロンと寝そべったり、すってんコロリンと転がったり、畑のイモを思う存分掘ったり、田んぼで泥まみれになって遊んだりすることがやりにくいんですね。2011年3月11日の原発事故以来、保育園や幼稚園では、放射線被ばくが気になって、それまでのように園のまわりを散歩することができなくなってしまいました。散歩によって二足歩行することは「ケモノ」が「ヒト」に進化する過程そのものですし、そのことによって、言語が明確に話せるようになったり、四季折々の周囲の景色の変化を感じ取ったり、信号や横断歩道に気を遣う社会的ルールを学んだり、ワイワイと互いの意思を通じ合ったり、時には転んで痛い思いをしながら身を守る知恵を身につけたり…、とても大切ないろいろなことを学びます。保育にとって散歩は思いのほか大切なエクササイズです。

■ 2歳児ついに散歩

私が原発事故の2ヶ月後から通っているいろいろサポー

トしている福島市渡利地区の「さくら保育園」で、2013年10月4日、ついに2歳児が人生初めての散歩に出かけました。2歳児ということは、あの忌まわしい東日本大震災後の原発事故の年に生まれた子どもたちです。出かける前は緊張した面持ちだったそうですが、写真を見てください。みんなすぐに散歩に慣れて、嬉しそうに歩いています。



2歳児の人生初散歩。福島市・さくら保育園。（2013年10月4日）

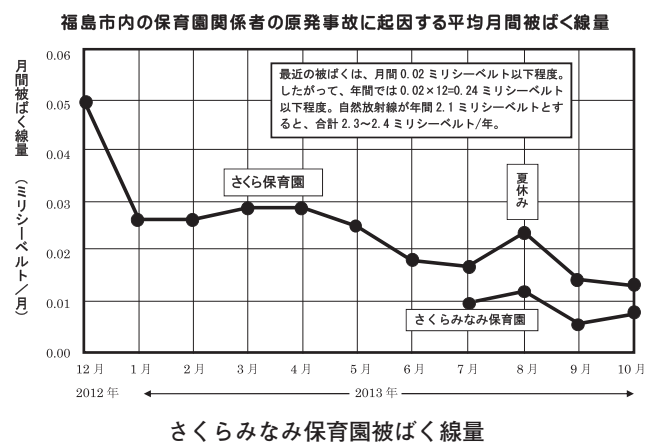
散歩には保育者だけでなく、保護者たちの心配がありました。「放射線被ばく」「放射能汚染」「ホットスポット」などというよく分からない「マイナス・イメージ」の用語を聞けば、だれでも不安になります。わが子を危険な環境にさらしたくない—そう考えるのが親としてのごく普通の感情でしょうね。

おまけに、「福島には行かない方がいい」とか、「福島産の野菜は買わない方がいい」といった情報も飛び交っていましたから、被災者たちはいっそう不安に苛まれたことでしょう。「根拠のある不安」は恐れなければなりませんが、「根拠もなく不安をまき散らす」ことは慎まなければなりません。それらは時に被災者に対する偏見や差別感情を生み出し、有害な風評被害によって被災地域に一層の困難をもたらすことにもなりかねません。

被ばく線量を測定する

安斎科学・平和事務所では、2012年12月から「さくら保育園」の園児や保育者や保護者100人余りに積算線量計を無償配布し、毎月被ばくした合計の線量を継続測定しました。園児たちが保育園にいる間の被ばくはほとんど差が出ないのは当然のことですが、家に帰ったあとの放射線環境や、休みの日にどのような屋外環境でどんな過ごし方をするかには人によってかなりの差があるため、1ヶ月の被ばく線量をみると人によってそれなりに違いが出ます。

「さくら保育園」関係者の被ばくの平均値をグラフに表すと、図のようになりました。

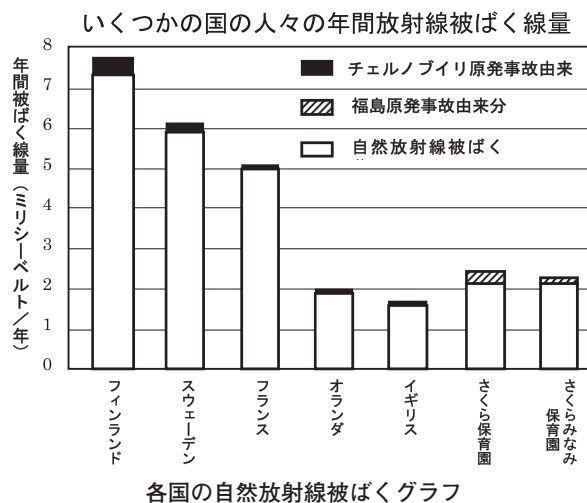


遅れて測定を始めた姉妹園「さくらみなみ保育園」の最近3ヶ月のデータも表してあります。幸い、放射線被ばくは全体としては漸減傾向で、夏休みだった8月は被ばくの低い保育園で過ごす時間が減少したため、かえって両園とも平均値がちょっと増えました。保育園の方が被ばくレベルが低いんですね。最近の被ばくレベルは1ヶ月あたり0.02ミリシーベルト程度ですから、1年間では0.25～0.3ミリシーベルト程度でしょう。

一方、日本人は自然界から年間2.1ミリシーベルト程度の放射線被ばくを受けているとされています。内訳は、宇宙線0.3ミリシーベルト、大地に含まれる自然放射性物質からの被ばくが0.33ミリシーベルト、大気中に浮遊する自然放射性物質の吸入に起因する被ばくが0.47ミリシーベルト程度、食物中の自然放射性物質に起因する被ばくが約1ミリシーベルトと報告されています。だから、「さくら保育園」の関係者は、自然放射線と原発事故由来の放射線と、合わせて2.3～2.4ミリシーベルト/年程度を浴びていることになります。

ヨーロッパ諸国の被ばく

自然放射線のレベルは、大地に含まれる自然放射性物質の濃度によって違いがあります。大地に含まれるウランやトリウムなどの自然放射性物質が多ければ、そこから放出される放射性ガス（ラドンガス）も多いため、大気中に浮遊する放射性物質も多くなって、それを吸入することによる内部被ばくも増えます。参考までに、フィンランド、スウェーデン、フランス、オランダ、イギリスの被ばく状況を、さくら保育園、さくらみなみ保育園の被ばく状況とともにグラフに表してみました。ヨーロッパ諸国では、自然放射線のほか、1986年4月26日にウクライナ共和国で発生したチェルノブイリ原発事故に起因する被ばくも加わっています。これを見ると、福島市の保育園関係者の被ばくが諸外国の人々の被ばくに比べて際立って高いといった実態はありません。根拠もなく被災者や被災地に対する偏見や差別感情に陥らないように、しっかりと科学的な実態把握を進めることはとても大切なことでしょう。



言うまでもないことですが、福島原発事故の現場は、①溶融核燃料の実態が分からないこと、②汚染水問題が深刻と緊急の度を加えていること、③事故原発で働く労働者の被ばくが増大しつつあること、④依然として15万人の被災者がふるさとの街を離れ、将来の生活展望を描けないでいること、⑤被災地の除染によって生じた廃棄物の最終処分の見通しさえないことなど、決して侮れない状況が続いていますので、引き続き厳しい監視の目を向ける必要があるでしょう。

移行期の激変と平和研究拠点形成

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐)

立命館大学国際平和ミュージアムの開設20周年記念に合わせて2012年度末に第三ステージ・プランが発表されている。2014年度からの実施を予定して、平和研究センター設置を打ち出している。立命館学園の歴史と今日の社会の動きを眺めながら、研究拠点形成にかかわる課題をいくつか取り上げたいと思い、本文書で館長の意見を整理してみた。

社会貢献をする教学機関として

まず平和研究センターの位置付けとして、知の創造・発信・普及を通じて社会との連携や貢献を考えると、研究センターの教育面の機能も大事だと言える。いま社会連携機関として位置付けられている国際平和ミュージアムは、教学機関として学園内の位置付けを明示すべきだと考えている。そうすることによって、初めて専任の研究員、学芸員の役割や教員の所属を明確化できる。大学院教育への貢献から始めれば、研究的要素も取り入れやすくなる。研究センターの発展と共に、立命館学園のふたつの大学の卒論、修論や博士論文の研究にも貢献できる。魅力的な研究センターになれば、国内外の他大学の研究者とも協働できるようになる。このような事を目指すのであれば、どのような課題があり、どのような選択を、我々が考慮しなければならぬかを考えてみたい。

まず、博物館機能を兼ねた研究所であることを中心軸に置くべきである。そこで、一五年戦争の記憶の継承と歴史に誠実に向き合う学園の理念を創造豊かに展示することは重要である。理性と感性に訴える展示を通じて歴史と誠実に向き合い、その教訓は今後の平和構築にどう役立つかを基本研究課題として取り上げることができる。比較的にわかりやすく展示できる戦争の恐ろしさから、もっと見えにくい構造で支えられている平和の表現を考えると、展示技術や手法に対する研究も取り入れられればと思う。ミュージアム自体を、学園のProject Based Learning (PBL)の現場として位置付けられる。日ごろ展示されていない収蔵物も研究対象になり、コレクションの有効利用が高まる。もちろん我々の収蔵品だけでは、すべてのことを語れないと思う。国内外の博物館との連携、デジタル・アーカイブ・プロジェクトと連動していくことを考えると、さらに相乗効果が高まると言える。

今までの収蔵品は一五年戦争を中心に、2005年リニューアルした2階の常設展示では、2000年以降の

戦争と平和への歩みを展示している。この展示内容は、一五年戦争の常設展示や、中野記念ホールでの企画展示に比べて、まだ発展の余地がある。

第三ステージ・プランでこの方向性を強化し、本格的に今日の平和構築の課題を取りあげれば、研究センターの方向性と展示の豊富化を目的にした今後のコレクションズ・ポリシーも見えてくると思う。

激変する移行期と平和の本質

勝手ながら館長の思いとして、ミュージアムの今後の行き先を考えてくださる皆様に、総合学園として様々な学問領域、年齢層、国や文化の視点に立って、助言を頂ければありがたい。

今の時代は、激変の移行期と思う。いま日本の大企業の利益の7割程度が海外で稼いでおり、国民所得の半分が日本国外で発生している。この経済交流先は、振興諸国や発展途上国である。数多くの最貧人口を抱えながら、富裕層も増えている移行経済圏は、日本の富の発生元になっている。必ずしも、政情安定の国や地域ばかりではない。資源外交上で、日本が付き合いなければならない国々でも似ている状況がある。平和産業を重視して、初めて世界で経済大国になった日本にとって、世界平和の重要性は新たな意味を持つようになっている。

この視点に立って、平和の本質をつかむことは新平和研究所の使命になり、未来を想像すると、どのような平和構築の課題を立命館の国際平和ミュージアムが取り上げるべきかがみえてくる。自分の所見に過ぎないが、移行期の時代と言われている今日、平和構築に関して以下の三つの研究領域が浮かんでくる。

1) 武力紛争・暴力の是正

武力や暴力による人の生命への危機が今も続いているが、構造的な違いがあると感じる。

まず武力紛争は、国家間から国内紛争に大きく変わってきている。第二次世界大戦後にできた国際社会の集団安全保障体制のもとで、国内紛争に対応しようとする、内政干渉という反発を受けやすい時代になっている。国際社会の干渉にかかる時間を短縮できない限り、ルワンダとソマリアの国境周辺で亡くなった数百万人の悲劇が繰り返される危険がある。だが十分審議しないで干渉すると、イラクの大量破壊兵器の存在を確認せず侵略したように、国際社会の一部が選んだ行動は正しかったかという疑問が残る。今後の取

り組みをどうすべきかが一つの大きな平和研究領域と言える。

国連総会に提示した行動指針、「保護する責任」(Responsibility to Protect : R2P)では、人を守る責務について書いている。その責務は「予防する責任」(Responsibility to Prevent)、「対応する責任」(Responsibility to React)と「再建する責任」(Responsibility to Rebuild)で構成されている。日本の平和憲法下で、どのように日本国の外交路線を明示すべきかが課題になる。国際社会に日本の視点を理解してもらう努力に、立命館大学国際平和ミュージアムの平和研究センターはどのような役割を果たすことができるかを考えなければならない。ミュージアムの展示の力を、どう活用できるかが問われる。歴史と同様に、未来の平和創造にも誠実に向き合うために、知恵を生み出さなければならない。

2) グローバリズムの取り組み

いま環太平洋パートナーシップ(TPP: Trans-Pacific Partnership)の協議課題で、発展途上国や新興諸国のインフラ整備に先進諸国の企業の加入に関する障壁を無くすべきと言われている。対象国のインフラは、よりコストが安く、効率よく技術的にも優れた結果を生み出すのであれば障壁がないほうがよいと思う。だがこのような事業を行う時に、インフラを発注する国への技術移転や高度な技術者養成プログラムを兼ねて実施すればより意味深いものになる。またこのような事業で養成された人材や発注国の企業が、受注国にも派遣され働けるように労働市場の開放も求められると思う。

これから数十年間にわたって、数百兆円のインフラ整備をしなければならない高齢化社会日本にとってもこれは重要な課題と言える。皆が得するWin-Win状況を生み出せるように、ミュージアムのセンターが提案し行動すれば、貿易摩擦の是正にも貢献できるようになる。食品の安全基準の低下は、TPP参加によって恐れるべきこととも言われている。これを理由に、日本の農作物市場の関税、輸入手続き等の取り下げは困難と言われている。人の生命は地球上同じ価値であると思えば、食品の安全はすべての人々にとって重要と言える。TPP交渉の中で日本の高い水準での食品の安全性をどんな国でも担保するべきと訴え、その基準や国際規格設定に研究センターが貢献することも考えられる。このように足が地に着いた研究課題と取り組み、解決策を導かせる努力をすれば、日本の貿易外交と国際社会の安全保障に貢献できる。

3) 地球環境・資源問題の対応策

東日本大震災以降、先進諸国の原子力依存度が高いことによる課題が明確になり、災害大国日本では一回停止した原子力発電所の再稼働は困難だとわかった。電力の安定供給に重点を置かざるを得ない産業大国日

本では、エネルギー資源の化石燃料依存度が高まり、目標にされた温室効果ガス排出基準を満たしていない。最近、ポーランドの首都ワルシャワで行われた国連気候変動枠組み条約加盟国会議(Conference of Parties, COP 19)での日本の苦しい立場に同情する。

日本の国民所得1単位あたりの温室効果ガス排出量を減らすことを考えれば、海外で発生する50%の富の分のエネルギー効率を技術導入・移転等によって高めながら振興諸国や発展途上国の発展の健全化にも貢献できる。そのような対策を海外で実施しながら、日本国内の温室効果ガス排出の削減対策とポスト原子力エネルギー資源獲得の戦略をオープンに討議するために、研究センターは場を提供できるであろう。地球環境問題と各国の発展に不可欠なエネルギー・資源問題は同じ紙一枚の表と裏と言える。

フィリピンでの台風「ハイラン」によって大勢の人が犠牲になった災害や、40万人を雇用しているスリランカの紅茶産業の急速な生産減等の原因は、気候変動と言われている。このような危機によって、各国や地域社会の秩序維持に大きな打撃を与える現象についても平和研究センターが取り組むべき真の課題と言える。

上記のような課題と誠実に向き合い、他者の幸せを呼び寄せる行動は、平和創造の根底にあり「立命館憲章」に刻んでいる精神だと言える。課題の本質とその対応策に知恵を絞り、国内外の社会と協働し、その課題や取り組みの可視化を展示を通じて行っていくことは、ミュージアムの第三ステージ・プランの使命だと思う。

困難な道ですが、我がミュージアムの発展に、数多くの創造豊かな企画を期待している。



スリランカの製茶産業が直面する危機：その1
名産地ウバのバッサラ地区：気候変動による土壌流出で潰れている



スリランカの製茶産業が直面する危機：その2
名産地ヌワラエリヤ：小雨が降らなくなり茶葉の性質変化と価格低下

被爆死した父の形見、ベルトの留め金と『消えた広島 ある一家の体験』

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

国際平和ミュージアム地下室に、立命館大学名誉教授であった故永原誠先生が寄贈された父親のベルトの留め金があります。急いでミュージアムを訪問した場合には、つい見落としてしまうかもしれません。そのベルトの留め金を見ただけでは、なかなかその意味を理解することがむずかしいと思います。しかし永原先生の著書『消えた広島 ある一家の体験』（ウィンかもがわ、2013年出版）を読むと、言葉では表現できないほどの辛い被爆体験を知ることができます。

永原誠先生は、『英米文学-名作への散歩道 アメリカ篇』（東郷秀光編、1985年出版）に、ジョン・スタインベック『怒りのぶどう』について執筆されました。私はその本に、ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』について執筆していましたので、お名前だけ存じていました。その後2012年10月20日に京都市で「被爆2世・3世の会」結成の集いで、「2世・3世の会」の親組織に相当する京都原水爆被災者懇談会世話人代表として永原誠先生があいさつをされました。懇談会は1965年に設立されたこと、そして被爆者が自らの命とくらし守るために活動してきた47年の歴史と実績を簡潔に紹介されました。そして「2世・3世の会」に対する3つの期待が語られました。まず、被爆者、特に肉親の実際に味わった恐怖と被爆体験を後々まで語れるよう工夫して欲しいことです。二番目に、私たちの世代では叶わなかった核のない世界を実現することです。三番目に被爆2世・3世の自らの健康と原爆との関係を究明していくことです。最後に、京都府下だけでも数千人となるはずの2世・3世にしっかりと働きかけていき、末永く元気な活動が続けられることへの期待を述べられました。その後懇親会で、初めてお話することができました。その時初めてベルトの留め金を寄贈されたことを知りました。

残念ながら永原先生は2013年5月23日に亡くなりました。しかし『消えた広島 ある一家の体験』という本が、2013年9月10日に出版されました。それはご遺族の自費出版の形で発行されました。『消えた広島』の約7割は、「幼少年の記憶」と「軍都広島」について書かれていて、広島市の街の様子や人々の暮らし、特に食糧不足や軍需工場での辛い仕事などを知ることができます。最後に永原先生の家族の被爆体験が書かれていますが、愛情豊かな両親について前半で知ることができるが故に両親が被爆して亡くなられた辛さを想像することができます。爆心地からわずか四、五百メートルで被爆された父親について、次のように書かれています。

早速に対面したわたしたちは、声を呑んだ。背もたれのある椅子に立て掛けてある、真っ黒焦げの物体が父だったのである。両腕、両脚は根元から無くなり、頭部には両の眼窩とあけた口とが三つの空ろな穴を作っていた。……父を仰向けにしたとき、誰かがこれ一つだけ焼け残っていたスポンのバンドの金属製バックルに目を留めて、ああ、これは永原先生のバックルだといってくれたのだそうである。戦争が人々の心をとかく荒廃させていたなかで、死者への思い入れの深さというか、人情の篤さというか、頭の下がる思いであった。

せっかく再会できた母親は急性白血病で亡くなり、ご自分で遺体を焼かないといけなかったという辛い体験を記されています。この『消えた広島 ある一家の体験』という遺著を読みますと、寄贈されたバックルから原爆の恐ろしさ、永原先生の強い平和への願いを感じることができると思います。



京都「被爆2世・3世の会」結成の集いで（2012年10月20日）



永原誠先生の父親のバックル（立命館大学国際平和ミュージアム所蔵）

『2つの世界大戦と原爆投下』（早川書房 2013年4月刊）

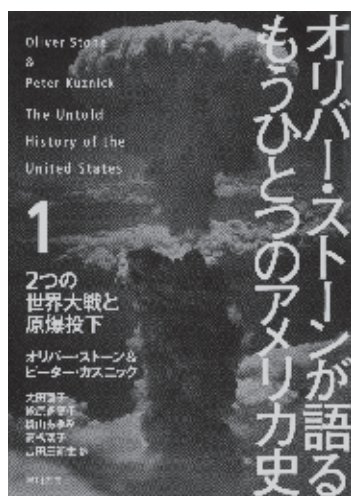
（『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』第1巻）

オリバー・ストーン、ピーター・カズニック著 大田直子 ほか 訳

立命館大学国際平和ミュージアム

専門委員 藤岡 惇

（立命館大学経済学部教授）



ピーター・カズニックさんといえば、米国の首都ワシントンにあるアメリカン大学の歴史学科准教授。1995年以來毎年8月1－10日になると、評者とともに、数十名の日米の学生を率いて立命の平和ミュージアムを起点に、広島・長崎を巡る「平和巡礼の旅」を主宰してきた人だ。

ピーターは「核の文化史」と米国映画の関係を追究してきた人でもある。1996年秋学期からアメリカン大学に「オリバー・ストーンのアメリカ」なる科目を設けて、映画界の巨匠のオリバー・ストーン監督をゲスト講師として招いてきたが、2012年秋に、ピータはオリバーと組んで、10のエピソードをもとにアメリカ史の暗部を探ろうとする記録映画シリーズを制作した。このシリーズは世界的に大きな反響を呼び、日本の場合は、各45分の映像10本にまとめられて、NHKのBS1で放映された（好評につき、その後2度再放送された）。

映像の典拠を示すため、2人は大部の本も出版した。日本語版は3巻に分けて刊行されたが、その第1巻目にあたるのが本書だ。

米国は、何のために日本の庶民密集地区の上空に、異なるタイプの原爆を2発たてつづけに投下したのか。日本の侵略戦争を早期に終わらせるために不可欠だったというのが米国政府の公式見解だが、それが嘘であることを本書は暴いていく。

日本を降伏に追い込んだ主因は、原爆投下ではなく、ソ連の参戦だった。ソ連軍が本土に進攻すれば、天皇制が打倒され、天皇処刑といった「最悪事態」を招きかねない。敗戦が避けられないとすれば、米軍に降伏したほうがましだと考えられたからだというのが本書の主張だ。

それでは米国はなぜ原爆を投下したのか。冷戦到来を予想して、ソ連に威圧を加えておきたかったことに加えて、2発の異なるタイプの原爆を投下し、その効果の人体実験をしておきたかったからだ。原爆投下までは日本に降伏させぬよう、ポツダム宣言草案の「現皇統下の立憲君主制の存続もありうる」との一節が削除されるといった小細工も施されていたと本書は説く。

原爆投下は、軍事的に不必要で、道徳的に是認できない、投下責任を負うトルーマンは戦争犯罪人として訴追されるべきだったという主張を、ピータは19年前から展開してきたが、本書はこの点を説得的に立証している。

米国側には原爆投下を避ける道はなかったのか。1944年7月の民主党大会で、4期目をめざすルーズベルト政権の副大統領にニューディール改革派の本流を継ぐヘンリー・ウォーレスが再指名されておれば、ルーズベルト病死後は、ウォーレスが大統領になっていたであろうし、そうなれば植民地体制の崩壊もスムーズに進み、原爆投下も、その後の冷戦もなかったであろう。しかし「帝国」を死守しようとする英国派財界人と南部の人種差別勢力とが連合し、ウォーレスの指名を強引に阻止し、無名のハリー・トルーマンが選ばれたことから、原爆投下から冷戦開始、ベトナム戦争へといった道が開かれてしまったと本書は説いている。

注文をつけると、ソ連侵攻というムチに加えて、原爆投下後に「皇室の安泰」保障というアメの力が復活する「裏事情」にも、光を当ててほしかった。またドイツ軍を打ち破る主力となったのはソ連だったという主張は間違っていないが、スターリン体制はナチス体制と類似した体制に変質しており、戦後の核軍拡競争には、ソ連側にも一定の責任があると評者は考えるが、これらの点にも触れてほしかった。

ともあれ、学者の探求力と映像芸術家の表現力とが結びついたとき、どれほど強烈な変革力を発揮するかを本書は証明した。今夏の19回目の平和巡礼の旅にゲスト講師として随行し、受講生に深い影響を与えてくれたオリバーにも感謝したい。

開催報告(2013年7月～10月)

今号では2013年7月から10月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第80回 夏休み企画「一億必見！戦時標語」 2013年7月27日(土)～8月25日(日)

一五年戦争期、国民を総力戦体制に動員するための標語や国策宣伝が、人々の暮らしにどのように入りこんでいたかを、ポスターやチラシ、弁当の掛紙や観劇プログラムなど、当館が収蔵する32点の資料を通じて紹介しました。また今回の展示では、今年度博物館実習生7名が展示の一角を担当しました。新聞やテレビなどマスコミにも取り上げられ、多くの方にご来場いただきました。

実習生の声

ミニ企画展示の企画・準備に参加する中で、様々な戦時標語に触れ、改めて総力戦体制下での人々の生活について考える機会となりました。標語の公募や日常生活の品々からは、人々がいかにか戦時標語に囲まれて生活していたかを感じました。戦時標語から読み取れる当時の状況の中で、果たして人々はどのように戦争を受け止めていたのか、考えずにはいられません。また、大衆による標語や軍歌のパロディ化からは、そのような中でも力強く生きた人々の様子を感じることができ、とても興味深かったです。

最後に、学生スタッフや職員の方々に支えられ、無事開催することができ、貴重な経験となりました。深く感謝を申し上げます。

(文学部4回生 朝倉由衣)

戦時標語それ自体は、有名ないくつかの標語に関しては知っていましたが、様々な標語を時系列順に見たり、その成立過程について知ったりすることは今回が初めてでした。展示されなかった資料も含め、歴史資料に多く触れられたことは貴重な経験になりました。

また文字という、いかようにも展示ができる媒体を展示することは、その自由性ゆえに難しく感じましたが、学芸員の方や他のメンバーと協働することで、よい展示ができたと思います。お世話していただいた職員の方も含め本当にありがとうございました。

(文学部4回生 林 凌)



夏休み企画「一億必見！戦時標語」
展示の様子

第81回 「平和をつむいで20年」 2013年9月14日(土)～10月6日(日)

1992年の国際平和ミュージアム開館の翌年から、来館者へのガイド活動等を行っている「平和友の会」。今年設立20周年を迎えるのを機に、これまでの歩みを振り返り、活動の全容を紹介する展示を行いました。会場には活動を1年毎にまとめたパネルや、膨大な学習会の記録、設立当時から発行を続けている会報「平和友の会だより」、参加・協力してきた「平和のための京都の戦争展」の写真など約30点の資料が展示され、訪れた人たちは各々資料を手に取り、会の歴史やその活動内容に読み入っていました。



「平和をつむいで20年」展示の様子

平和友の会より

1993年、安斎育郎館長代理(当時)が戦争体験の語り部を市民に呼びかけて始まった、ボランティアガイド養成講座の修了生64人が集まって結成した「平和友の会」は今年で20年を迎えました。活動の節目として「平和友の会」がこれまで参加・協力してきた、「平和のための京都の戦争展」やさまざまな活動を知ってほしい、20年間ボランティアガイドなどの活動を続けてこられた原動力を知ってほしい、そしてこれからの活動の励みになればと思い、「平和友の会」のあゆみの展示を企画しました。

実行委員会をつくり、活動を1年ずつ整理していくうちに懐かしさのあまり昔話に花が咲くこともたびたびでしたが、なんとか20年分の活動記録を展示パネルに仕上げることができました。

ミニ企画展示室で来館された方や最近入会された会員との交流がとても楽しく、「平和友の会」の活動を知ってもらうよい機会になったと思います。

最後に立命館大学国際平和ミュージアムの担当の方々には大変お世話になりました。

(企画実行委員 片山一美)



平和友の会のみなさん

ロビー展示「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」

会 期：11月19日(火)～12月15日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
1階ロビー

1943年10月、戦局の悪化に伴い、大学の学生や大学予科、高等学校、専門学校等の生徒（総称して「学徒」という）の徴兵猶予が停止され、将来有望な多くの学徒が戦地へと出征しました。この学徒出陣から、今年で70年になります。本展では、収蔵資料の中から学徒らの手紙や手記、当時の新聞や雑誌等の資料を展示しています。

手紙や手記からは、戦地へと赴くこととなった学徒たちの内面をうかがい知ることができます。出征に対する戸惑いや苦悩を綴ったものがある一方、出征に対する決意を記した手記もあり、学徒達の出征に対する向き合い方はそれぞれでした。

これらの手紙や手記とは対照的に、新聞や雑誌等の報道資料には学徒出陣を巡る社会の様子が映し出されています。紙面において大々的に取り上げられている壮行会の熱狂ぶりや、雑誌に掲載された当時の岡部文相のコメント等を見ると、学徒達がどういった社会状況下に置かれ、そして戦地へと送り出されていったのか、その様子をうかがい知ることができます。

立命館大学は1953年12月8日に、学徒出陣によって戦火に斃れた若人の苦悩を表した戦没学生記念像「わだつみ像」を建立しました。それ以来、大学は「二度と学生を戦場に送り出さない」、学生は「二度とペンを銃に持ち替えない」ことを決意し、毎年欠かさず「不戦のつどい」を開催してきました。

今年は、学徒出陣から70年、「わだつみ像」建立から60年になります。学徒兵は国家によって動員された被害者である一方で、侵略戦争の加害者になりました。それを強制した国家の有り方を問い、国内外のあらゆる戦争犠牲者に思いをはせて、今一度「わだつみ不戦の誓い」を新たにしていいただければと願っています。



学徒出陣壮行会に向かう立命館大学学生（1943年）
（立命館史資料センター準備室提供）

「モノが語る戦争の記憶」

2013年11月、学徒出陣70周年を機に、「モノが語る戦争の記憶」を常設展示の学徒出陣エリアに公開しました。これは、収蔵資料「作業日誌」（詳しくは、本号「スポット」）とその背景についての理解の考察を深めるため、作成者に当時の体験についての聞き取りをした映像と資料を見ていただく取り組みです。

私たちは、体験の保存や再生はできませんが、そこに存在した「モノ」は残り、そこで起きた人々の営みは「記憶」されます。平和博物館では、伝えねばならない出来事の重大性ゆえ、資料は「証拠品」、証言は「裏づけ」として立証に力が入りますが、このプロジェクトは「モノ」を媒介として、体験者の「記憶」の中に当時の人々の営みをみていただく、という形で歴史にアプローチしています。

「作業日誌」の寄贈者である岩井忠熊氏は、1943（昭和18）年に京都帝国大学から学徒出陣し、武山海兵団の予備学生となりました。聞き取りを行った京都大学農学部のグラウンド（壮行会の会場）では、当時の風景や壮行会で聞いた言葉について語られています。当館にて資料を手にとった際には、日誌を記した当時の日常が蘇り、並列する兵舎の窓がすべて同じ高さの開かれていた風景と、それを寸分違わずそろえるよう厳しく指導された当時のことを思い出したと語られました。

証言は、2～3分程度の映像8本にまとめられ、岩井氏のプロフィールや、「作業日誌」の全画像データと共にiPadにて閲覧できます。



「モノが語る戦争の記憶」画面



展示室の様子

2013年度博物館実習受け入れ

学芸員資格取得を希望する学生にとって「総まとめ」の科目である博物館実習。今年度も6月末より7月の平日、土日を含む日程で実施しました。受け入れた7名の実習生の在籍する大学を紹介すると、本学文学部、京都教育大学、京都橘大学、京都精華大学、となり、各々色々な分野を学んできた学生が集まりました。

実習指導の内容については、文部科学省から出された「博物館実習ガイドライン」にできるだけ沿う形で進めることを前提とし、「いつでも必要な」ミュージアムの維持管理に欠くことのできない内容のものと、この時期でないとできない「旬」な内容のものを織り交ぜることにしています。

「いつでも必要な」実習内容の一つに、温湿度計の校正作業があります。館内の温湿度計を1箇所に集めての作業となり、昨年度までは収蔵庫内や作業室などで行ってきましたが、今年度はこの春改修工事が完了し、実習時期にはまだ資料を搬入する前の外収蔵庫で行いました。くん蒸が終わった9月末には、この収蔵庫にも館内の収蔵庫やその他で保管していた資料を大量に移しています。

その他には、収蔵庫内の清掃、受け入れ資料の整理等、学芸業務が中心となりますが、館長による講義や、広報、庶務、イベントといった館の運営業務説明も取り入れ、国際平和ミュージアムの理念や設置目的等を包括的に理解できるようにしています。

「旬」な内容としては、7月27日(土)～8月25日(日)に開催した、夏休み企画第80回ミニ企画展示「一億必見！戦時標語」の展示準備・設営作業に関連した作業を取り入れ、これが今回の実習の中心となりました。展示が開幕するまでには、大まかに言うと、①展示を

企画②資料を選定③必要な解説・キャプション等を準備④展示レイアウトの検討⑤設営作業といった段階がありますが、今回の実習生には②～⑤の段階を経験できる内容としました。

今年度は実習生全員で、来館者が展示内容をより深く理解するしかけを作るべく、展示室の一角を担当しました。ここは展示場入り口から見て正面にあたる部分で、来館者に一番目につく場所となり、通常は展示の目玉になるような資料を展示する部分です。

ここに当時の「戦時標語」の中からミュージアムで希望する標語以外は、自分たちで選んだものをパネルにして展示しました。実際の設営作業は彼らなりに、「観^みせること」を考え、時間をかけて取り組みました(9頁に実習生2名の感想が掲載されています)。

この他、展示候補資料を整理し、その中から一部の展示資料を選定しました。これらの作業を通して通常学芸員として必要な、資料の扱い方や、資料整理の手順、展示レイアウトの検討といった内容を身をもって取り組めるものとなりました。

今回の展示は、今年度秋季特別展「目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚—」のプレ企画として開催されたもので、特別展の中にも「戦時標語」のコーナーを設け、実習生の制作したレプリカなども参考資料として紹介しました。また昨年度の実習生が制作した「紙芝居」映像なども利用しました。

ミニ企画から特別展示へ「つながる展示」を実習生と取り組み、私たちとしても意義のある取組になりました。

(学芸員 岸本菜穂美)



展示レイアウトの検討作業の様子



担当コーナーの前で今年度実習生一同

小中学校教員対象下見見学会2013

開催日：2013年7月30日（火）、31日（水）
8月27日（火）、30日（金）

開催時間：13：00～15：00

所要時間：120分

参加者：46校 151名

《内 容》

- モンテ・カセム館長のあいさつ（7/30のみ）
- 安斎育郎名誉館長による平和講義・質疑応答
- 展示見学（ボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフの解説あり）
- 収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての利活用と貸出教材キットの紹介
- 個別相談会（見学受付・平和講義やガイドブックの事前送付等、各種サービスの案内）

当ミュージアムでは、2006年から毎年7月、8月に教員向けの下見見学会を開催しております。今年も近畿圏の小中学校を中心に46校151名の先生方にご参加いただきました。

安斎育郎名誉館長は、平和講義の中で、戦争がなくても私たちの身のまわりに多く存在する直接的、構造的、文化的暴力について解説し、それによって一人ひとりの能力が豊かに花開くことが阻まれている状態が果たして平和と言えるのだろうかとの疑問を投げかけました。そして、今後の平和教育のあり方について、「自分に何ができるか」と主体的に考える姿勢をはぐくむことが重要、と講義を締めくくりました。

当日参加された先生方からは「平和教育とは何か考え直すきっかけになった。」「ボランティアガイドや学生に案内してもらうことで見学のイメージを持つことができた。」といった感想が多く寄せられました。



安斎育郎名誉館長による平和講義のようす

2013年度 大学コンソーシアム京都インターンシップ生を受け入れ

立命館大学国際平和ミュージアムでは、大学コンソーシアム京都から、学校法人立命館にてインターンシップとして、立命館大学と京都造形芸術大学の学生各1名の受け入れを行いました。期間は8月1日から8月14日の間の計10日間でした。

インターンシップ生を受け入れるにあたり、獲得目標としては、国際平和ミュージアムの広報に関わって、大学生の来館者増加に関する政策を立案することとしました。

インターンシップ受け入れの期間は夏休み前半の時期に設定しました。ミュージアムでは例年、「平和のための京都の戦争展」が開催されている時期で、毎年、たくさんの来館者が訪れる時期でもあります。

初日に、主に戦争展の来場者向けに、夏から秋に開催するミュージアムの展示・企画をまとめて掲載したちらしを作成・配布しました。このちらしは戦争展開催期間中を通して配布しました。

期間の後半は、対象者を大学生に絞り込み、国際平和ミュージアムを知らない学生にどのようにして興味を持たせるか、国際平和ミュージアムの存在は知っているけれど、どんな内容の展示なのかかわからない人に、来館してもらうためにはどのような方法をとれば効果的かをテーマに、政策を立案してもらいました。また、大学生の皆さんに手にとってもらえるちらしの作成にも取り組みました。ミュージアム関係者へのヒアリングを通して理解を深め、大学生の来館者を増やすため

の方策を検討し、ミュージアムの顔ともなるちらしには、表現にも細心の注意をはらって作成しました。

そのほかにも団体見学の誘導や秋に開催される世界報道写真展の広報先への依頼など、ひとつひとつの業務を着実にこなしていました。

期間の最後には、大学生来館者増をねらって研究した方策をテーマとしてプレゼンテーションを行いました。

ひとつひとつの業務を積極的にすすめ、自身の考えや特性を活かして真剣に取り組んでいました。このインターンシップで得たことを活かして今後の学生生活を送ってほしいと思います。



ちらし作成の打ち合わせ中

2013年8月立命館土曜講座

「学徒出陣70年・『わだつみ像』建立60年 戦争と平和、大学そして学生」

8月3日：第3065回 岩井忠熊立命館大学名誉教授講演

「学徒出陣—わだつみ世代の伝言 出陣学徒70年目の証言」

京都大学在学中に学徒として海軍に入隊し、特攻艇・震洋の搭乗員でもあった岩井忠熊教授が、自身の戦時中の体験、研究者としての15年戦争下において日本のおかれた状況、そして「わだつみ」世代として、これからの日本を背負っていく若い世代への想いを語った。まず岩井教授は、戦後「わだつみ像」建立やその後、破壊された「わだつみ像」の再建にかけた自身の想いを語り、15年戦争の歴史と甚大な人的被害、当時の戦争がもたらす悲惨な状況について語った。

岩井教授は、15年戦争の性格を一貫した侵略性が特徴であると解説。絶対国防圏防衛のため、国民あげて総動員されていくなかで、高等教育を受けた学徒の動員に踏み切らざるを得なかった程、窮地に追い込まれていった当時の戦況についても語った。敗戦が必至の戦局のなかで、多くの若人が学業半ばで戦地に赴き、学徒兵の総数は10万人以上と推定され、特攻の戦死者も多かった。

また海軍時代についてのエピソードについても語っ

た。1945年3月19日、第39震洋特攻隊として海軍徴用船「道了丸」で佐世保から石垣島に向かう途中、22日に米国の潜水艦による魚雷攻撃を受け遭難。3時間以上泳ぎ続けた末に救出され、佐世保に帰港。九死に一生を得た経験等を語った。

質疑応答では、法学部の学生から若い世代へのメッセージを問われ、「私自身も戦争を横からただ眺めているだけの普通の学生だった。時勢は流動的で、いつも歴史は動いている。そういうものに常に敏感になって、特に戦争に関しては若い人も反対の意志をはっきりと表明してほしい。私は若い人たちに対して希望を持ち続けている」と、若い世代への想いを語った。体験に基づいた岩井教授の講演は、90歳とは思えないほど力強いもので、来聴者に大きな感動を与えた。



講演を行う岩井教授

8月31日：第3066回 芝田徳造立命館大学名誉教授講演

「軍国少年の足跡—特攻隊を振り返って」

はじめに、芝田教授は「徴兵免除を解かれ学徒動員兵として兵役に就かれた岩井教授と違い、私は戦前の軍国主義教育の中で育ち、いわゆる『軍国少年』として自ら志願して兵役に就いた」と説明。そしてそこに至るまでの教育の内容を、写真資料や戦争賛美のために覚えさせられた軍歌をときに披露しながら、分かりやすく説明された。

1943年5月、予科練の入隊申請書を両親に内緒で提出し、12月に入隊し、厳しい訓練を経て飛行兵を目指したが、戦況が悪化する中、搭乗する飛行機が少なくなり、飛行機には乗れず、多くの同期生が人間魚雷「回天」等にて特攻を命じられ、若い命を落としていったことなどについて解説。そして「このように講演していると、今でも17歳のままの同期生の顔が目の前に浮かび、居た堪れない気持ちになる」と心情を述べられた。

また、「終戦は、福島県郡山市で迎えたが、『八紘一宇』（第二次大戦中、日本の海外侵略を正当化するスロー

ガン）を心底信じていたため、戦後5年間くらいは、あの戦争が間違いであったとは思えなかった」

とした上で、「その後、『きけ わだつみのこえ』を読んだ時、手記を寄せた大学生たちが戦争の正当性に疑問を持っていたことを知った。自分たちのような軍国少年と違い、大学生たちは幅広い知識・教養を身につけていたため、戦争を客観的に判断できた。その時、『教育』というものの重要性を知った」と、戦後教鞭をとる一契機となったエピソードを披露された。

質疑に答えられながら、最後に「戦争というものは人間の感覚を麻痺させる。通常は人一人を殺せば犯罪となるが、戦争の場合はたくさんの人を殺せば殺すほど英雄になる。こんな不可解なことはない。絶対に戦争をしてはいけない」と締め括った。



講演を行う芝田教授

学生ミュージアムスタッフ学習会を開催

こころとからだで考える歴史：歴史教育従事者を対象とした体験型歴史平和教育ワークショップ

立命館大学応用人間科学研究科の村本邦子教授から、ワークショップの企画・提案を頂き、2013年9月14日（土）午前9時30分から12時30分に、学生ミュージアムスタッフ（平和に興味関心を持ち、国際平和ミュージアムの諸活動に関わっている立命館大学の学生・大学院生）を対象として、「こころとからだで考える歴史：歴史教育従事者を対象とした体験型歴史平和教育ワークショップ」を学習会の一つとして開催しました。

今回はファシリテーター（講師）として、表現アーツセラピスト/カリフォルニア統合学研究所博士課程の笠井綾氏にご協力頂き、学生ミュージアムスタッフら10名が参加しました。

まず初めに、自分がこれまで受けて来た平和教育や歴史教育について、その体験や学びを通じて今思っていること、感じていることなどについて紹介しあいました。次に、絵で表現するために、体を動かしたり声を出したりするウォーミングアップを行いました。つま先や足、腕などを使って挨拶をするなど、自由に体を動かしました。その後、「タッチドローイング」と

いう版画の手法で、手や指を紙の上で踊らせながら絵を描きました。できあがった絵の中から気に入った絵を幾つか選んで、一つの物語をつくり、ペアになって互いに共有しました。全体を通して、やっと「こころと体で考えるということ」について少し理解ができたところで、時間切れとなりました。

ワークショップを通じて、学生たちは、ミュージアムの展示解説をする時に、ただ聴いてもらうのではなく、小学生・中学生との距離を上手にとるということ、相手の立場、状況を考えて展示解説をすることの大切さを再認識しました。



ワークショップ中に「タッチドローイング」で描いた絵

第12回立命館附属校平和教育研究会を開催

立命館大学応用人間科学研究科村本邦子教授の協力を得て、「こころとからだで考える歴史：歴史教育従事者を対象とした体験型歴史平和教育ワークショップ」として、第12回立命館附属校平和教育研究会を2013年9月14日午後14時から18時に各附属校のミュージアム専門委員を中心に20名に参加を頂き開催をしました。

立命館の夏期集中講座のために来日した立命館大学招聘教授であるアルマンド・ボルカス氏（M.A. 臨床心理士、ドラマセラピスト、カリフォルニア統合学研究所准教授、リビング・アーツ・センター所長）を講師としてお迎えしました。

本企画は、歴史教育に関わる教師や平和教育施設のスタッフなど平和教育従事者が「二次受傷」について理解し、ミュージアムの展示と表現芸術療法の手法を組み合わせた体験型歴史平和教育プログラムを自ら経験しながら、ミュージアムをより安全で平和な学習の場にするための工夫をともに考えるというものです。

ワークショップの内容は、アメリカ人ドラマセラピスト、ボルカス氏が開発したHealing the Wounds of the History（HWH 歴史の傷を癒す）を体験す

るというものです。ボルカス氏は、アウシュビッツ生存者を両親に持ち、ユダヤ人とドイツ人の間に横たわる歴史的トラウマを乗り越え和解へと至るためにHWHを開発したそうです。

今回のワークショップでは、平和教育において教育者が直面する課題に対して、体験的なアプローチがどのように役立つか、企画を通じて参加者に学んで頂きました。通常1週間程のワークショップの内容を、4時間という短い時間の中で紹介いただいたものにすぎませんが、即実践で活かせる内容を盛り込んでいただいたことが特徴的でした。



ワークショップの様子

「生き方探求・チャレンジ体験」 ～京都市朱雀中学校2年生1名を受け入れ～

2013年11月5日（火）から8日（金）までの4日間、京都市教育委員会の主催による「生き方探求・チャレンジ体験」推進事業の一環として、京都市立朱雀中学校2年生1名を受け入れ、職業体験を実施しました。

当館の職業体験は、博物館業務の中で直接お客様サービスに関わる受付業務を中心に行いました。初日は朝礼で自己紹介をし、特別展開館準備後、午前地階受付業務、午後特別展受付業務及び特別展に寄せられたアンケート集計をしました。初日にもかかわらず、お客様が図録を購入される際には、事前に図録を準備し、積極的にお客様に挨拶するなど細かいところにまで気を配りながら仕事に取り組みました。二日目は、受付業務に加え、メディア資料室にて書架への図書の返却作業、除湿機のフィルター掃除を行いました。三日目、四日目は、更に2階常設展の京都史跡めぐりコーナーの中で京都市動物園について、見学に来館した小学生の団体に6回解説をしました。最初は「緊張します」と言っていたものの、来館者から先に挨拶されると緊張がほぐれ気持ちが落ちついたと言い、京都市動物園に戦争の影響がどうあったのかわかりやすく解説

ができました。展示解説の仕事は、伝える難しさを実感する一方、解説の内容を調べて覚え、大きな声で、皆に聞こえるように上手に出来たことで、「ありがとう」と、お礼の言葉を掛けて頂き、やりがいと自信が持てたようです。最終日、本人から体験した仕事で動物園の解説が一番良かったと聞き、こちらも嬉しくなりました。

この四日間の体験を通して、実際に体験することで新たな発見や気付きがあるということ、当館が伝える「平和とは何か」ということについて、学んでいただきました。博物館で働くということについても、理解を深めてくれたことと思います。



京都史跡めぐりコーナーで展示解説の仕事を体験

ボランティアガイド学習交流会を開催

広島・長崎への原爆投下の真実と和解を求めて一日米学生平和の旅を終えて考えたこと

2013年2月に開始した第8回ボランティアガイド養成講座の实地研修も終了し、新規にボランティアガイドに登録された方をお迎えして、学習と交流をかねた学習交流会が、9月21日（土）に開催されました。新しくボランティアガイドになられた14名のうち11名の方が参加されたのをはじめ、現役ガイドのみなさんや学生スタッフを含め、42名の方が参加し、学習会を通じて交流を深めました。

はじめに山根副館長からの開会の挨拶がありました。学習会では、藤岡惇教授から、「広島・長崎への原爆投下の真実と和解を求めて一日米学生平和の旅を終えて考えたこと」と題して講義があり、映画監督オリバー・ストーン氏も参加した8月の日米学生平和の旅を通じて、行動し、考えたことなど、展示解説に役立つお話をいただきました。講義の後には、活発な質疑応答がありました。

休憩をはさんだ後、藤岡先生の講義をもとに、グループごとに分かれて、交流をかねた意見交換を行いました。現役のボランティアガイド約20名のみなさんのほかに学生スタッフも3名が参加し、なごやかな雰囲気

気で意見交換が行われました。

意見交換後には、各グループからそれぞれ出された意見を発表し、藤岡先生からのコメントをいただきました。最後に出席者全員での記念撮影を行って終了しました。

学習交流会の終了後には、国際平和ミュージアム事務局と平和友の会の皆さんから、新規に登録されたボランティアガイドの皆さんへのガイダンスを行いました。

今年の実地研修を修了され新規に登録されたボランティアガイドの方は全員で14名となります。秋から本格的にガイドとして活動を行っております。どうぞよろしくお願いいたします。



全員で記念撮影

第8回 埼玉ピースミュージアム 埼玉県平和資料館



日本平和博物館会議

ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議（ロゴマーク）

埼玉県平和資料館は、「県民に戦争の悲惨さ及び平和の尊さを伝えることにより、県民の平和に対する意識の高揚を図り、もって平和な社会の発展に寄与する」（埼玉県平和資料館条例第1条から）ことを目的に、平成5年8月1日に開館しました。

以来、戦争体験の風化を防ぐために、失われつつある当時の生活用具や戦争に関する資料の収集、展示、戦争体験者の証言等を記録するなど様々な事業を行い、戦争と平和に関する学習の場を提供しています。

本年、開館20周年を迎えるに当たりリニューアル工事を実施し、10月20日（日）にオープンしました。また、これを機に愛称を「埼玉ピースミュージアム」にするとともに、これまで有料だった入館料を無料にしました。



埼玉県平和資料館

展示室

常設展示室は、昭和初期からの県民生活と戦争との関わりを、歴史的な推移の中で理解できるように構成されています。特に第二次世界大戦における世界や日本の動きの中、埼玉県からの視点を重視し、県民の目に映った当時の諸相を表現することに力点を置いています。

各種の展示品で構成されたコーナーのほか、戦前・戦中の復原住宅、また国民学校の教室から、空襲警報に促されながら防空壕に避難する疑似体験ができるコーナーなどがあります。

展示室出口に接する空間「エピローグ」では、「平和の創造」をテーマに、日本が世界に向けて行っている様々な国際協力活動を写真パネルで紹介しています。

企画展示室は、年間3～4回、特定のテーマで構成されたテーマ展を開催します。

分類展示室は、資料の保存を兼ねた収蔵展示室です。約1,200点の資料を用途や目的に応じて分類展示しています。手に取ることのできる資料も用意されています。



リニューアルで新設された大壁画

その他の施設

展示室のほかに、図書の閲覧やビデオ鑑賞ができるマルチライブラリー、当館がオリジナル制作したアニメ「最後の空襲くまがや」と「青い目の人形物語」を毎日上映している講堂があります。また、展望塔からは東に開けた関東平野が一望できます。

ピースキャラバン

博学連携事業の一環として実施している「出前授業」です。職員が実物資料を携えて学校へ出向き、授業を行います。主に小学校国語科の戦争教材や小学校・中学校の社会科に対応した授業を行い、当時の国民生活の様子など分かりやすく伝えていきます。他にも博学連携事業として学習用教材の貸出なども行っています。

基本情報

- ◆住所 355-0065 東松山市大字岩殿241-113
- ◆電話 0493-35-4111／ファクス 0493-35-4112
- ◆ホームページ
<http://www.saitama-peacemuseum.jp/>
- ◆開館時間 午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
- ◆休館日 毎週月曜日（月曜日が休日の場合はその翌日）
12月29日～1月3日
- ◆入館料 無料

戦争体験に裏打ちされた平和意識の大切さを改めて思う

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 足立 恭子

今年、平和友の会は設立してから20年目を迎えますが、私はガイド活動に参加してちょうど10年目になります。10年前はレギュラーガイドも20人程度、ガイドとしての学習会は行っていましたが、今のようにミュージアム側との定期協議もなく、すべてのことが手探り状態でした。

しかし来館者の中には直接の戦場体験者がよくおられて、中国戦線で泥沼の中を行軍する時、背囊の重さにどれほど苦しんだか。上官の目を盗んで重い弾を泥沼の中に捨てて行った。アメーバー赤痢で絶え間なく下痢をした時は、出征時から大切に持っていた日の丸の寄書きも下書き代りにした。弾が五発しか入らない三八銃は非効率で、米軍の火炎放射器などの前にはまったく役立たなかったことなどを、詳しく聞くことができました。政治の右傾化と歴史修正主義が台頭して来た頃ですが、体験者の一人は「日の丸と君が代は戦争の象徴、死んだ戦友を思い出す」と話されたのを思い出します。

10年後の今、戦場体験者はもう来られませんが、こうした体験談は現在のガイドに生きています。来館者が直接触れることのできる「背囊のレプリカ」の設置はとてもいいアイディアで、ここで、背囊の重さに象徴される日本の軍隊の非情さが説明できます。



背囊のレプリカ

のためにガイドをしていても言葉遣いに注意しなければなりません。

小・中学生たちには「15年戦争」「徴兵」「銃後」「学徒動員」「遺骨」「玉砕」「学童疎開」等など一つ一つ解説が必要ですし、遺骨を捧げ持つ集団の行列のパネルを見ても生徒たちは「あの人たち皆、なぜ同じところを怪我したの?」と聞きます。そこで遺骨の説明をするのですが、白木の箱の中には遺骨ではなく戦場の石か砂と名札しか入っていなかったこと、兵士は出征

時に両親に宛てて遺書と切った爪と毛髪を残して行ったことを、私の親戚の戦死者の遺骨が戦後還って来た時の状況と合わせて説明すると、生徒たちには「戦場での死」がどんなものか、やっと理解できるようです。

町屋に入っの説明は生徒たちの想像を高めるように、食べ物も衣類もなく空襲に怯えた戦争末期の国民のくらしが理解できるのですが、引率の先生たちも真剣に聞いて下さるので、後で感想を聞くと「私たちも父母から戦争体験を聞いたことはほとんど無いので、いい勉強になった」と言われます。私たちガイドの大半は来館する生徒たちの祖父母に当たる世代で、その中でも「少国民」世代の私などは、おそらく戦争体験を持つ最後の世代でしょう。それ故に最近ひとしお責任を感じます。引率の先生方には、ご両親からできるだけ戦争体験を聞いておくように、地域に体験者がおられるはずだから学校で聞く機会を持つように、古い学校であれば昔の学校日誌の記録など探して見るように、などと助言します。

ガイドで最もつらいのは「慰安婦」の場面の説明です。小学生の場合はまず理解できないし、時間の関係もあってカットしてしまいましたが、中・高校生でも戦場の慰安婦の実態は想像できません。それで現在の沖縄で米軍の性犯罪が絶え間なく起きている事実を話し「もし、あなたやあなたのお母さん、お姉さんだったら…」と問いかけると、生徒たちは一様に真剣な表情になり沈黙します。戦場、軍隊基地のある所ではかならず性犯罪が起きること、軍隊は殺人が目的であり人権の尊重などあり得ない集団であることを強調するのですが、この場面は学校での性教育や人権教育とも重なるところで、実際の学校ではどのような指導がされているかわからない私たちガイドには、問題の多い場面で、今後とも様々な形での学習が必要だと思います。

ガイドをする上での問題点は他にも多々ありますが、戦争体験に裏打ちされた平和の大切さを語ることが、今ほど大切な時はないと思い、日々衰えを感じる自分自身を励ましている毎日です。

常設展示見学者の感想 (2013年8月～10月)

すごく感動がたくさんありました。戦争はだめ!!ということがあらためて思いました。

女性 10代 滋賀県

世界には今こんなことがおきているんだ、と思い知らされて、改めて戦争とは恐ろしいものだと思った。

女性 小学生 滋賀県

世界はまだまだ平和ではないけれど、僕が努力をして世界を平和に近づけたいです。

男性 小学生 滋賀県

日本国憲法第九条の平和主義が日本にとっても世界にとっても未来を築く平和の基であることを大事にしたい。

女性 60代 沖縄県

色々なことを学べて良かったです。昔の家の様子など、とてもよく分かりました。

女性 小学生 滋賀県

僕の祖父も戦争を体験していて、被爆しています。祖父の話でも知りましたが、戦争はやっぱりひどいです。この思いを世界中に伝えてってください。

男性 20代 長崎県

このミュージアムに来たおかげで平和について考え学ぼうと思いました。また来館したいと思います。平和でいられるように！

女性 10代 京都府

戦後70年近く、戦争時代の記憶がどんどん失われていくことを心配しています。真の平和確立に向かって、過去の理解が何よりも重要と考えています。

男性 70代以上

より客観的な視座から「平和」を考えるという姿勢がうかがえるものでした。現代世界につながる紛争に至るまで、難しいテーマをまとめて形にされていて分かりやすかったです。

男性 40代 北海道

「戦争は二度とおこしてはいけない」という事を学べて、本当に良かったです。平和というものは、とてもすばらしいもの…。たくさんの方の学習ができて本当にうれしいです。

女性 10代 京都府

このミュージアムに来て、戦争の残酷さを知り、もう二度と戦争は起きてはいけない、そう強く思いました。私は今度、平和についての作文を書きます。その時、ここで学んだこと、戦争の怖さを発表したいと思いました。

男性 小学生 三重県

戦争の悲惨さがよく分かる展示でした。昔のものがそのまま残っているのが良いと思いました。

女性 小学生 滋賀県

世界で苦しんでいる人、戦争の被害にあった人のことなど、いろいろ勉強になりました。苦しんでいる人のためにも、将来役に立ちたいです。

女性 10代 和歌山県

平和とは僕にとっては戦争をなくせばいいだけではないと思います。平和のためには、みんながニコニコして、みんなで協力し、助け合い、手と手を取り合うことが大切だと思います。

男性 小学生 三重県

いろいろな角度から「平和」について捉えてあり、考えさせられることが多かったです。大学の教学理念である「平和と民主主義」を前面に出され、活動されることを期待したいですし、若い人たちにもっと立ち上がってほしい！

60代 福岡県

全てを見て回ったとき、涙が出そうでした。今の生活がどんなに楽で幸せなんだと思い、小さいことで弱音や愚痴をこぼしたり、無駄使いしていると思ったら、世界中で苦労したり、頑張っている人に申し訳ないなあと思いました。展示の最後の方の子どもたちの笑顔は本当に大切にすべきだと思いました。

女性 高校生 北海道

このような系統的な展示、戦争と平和、その歴史としくみを考え、未来に伝える施設がなかなかありません。大学として平和のためにこのような活動をされていることに感謝と敬意を表します。

女性 60代 茨城県

平和というのは、まだまだ先のことだと思いました。今、世界でうえ死にしている人や、病気で死んでいる人がいるのなら、やっぱり平等ではないと思います。だから、その人たちのためになにかできることはないかなあと思いました。

男性 小学生 京都府

※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2013年4月
～2013年10月
入館者状況

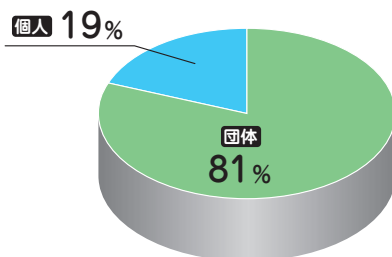
◎開館日数

176日

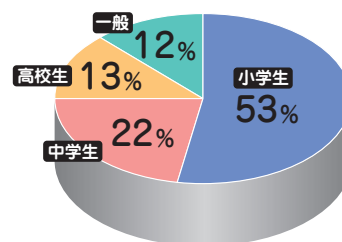
◎オープン後常設展入館者数累計

874,587名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2013年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	人数計(名)
総入館者数		1,711	5,382	5,139	2,400	2,738	2,917	10,051	30,338
特別展	春季特別展 『ジミー・ツトム・ミリキタニ回顧展-日系人強制収用所と9.11を体験した反骨のホームレス画家』 (5/14～7/20)								9,330
	特 別 展 『世界報道写真展2013 —WORLD PRESS PHOTO 2013—』 京 都 (立命館大学衣笠キャンパス) (9/18～10/13) 6,187 滋 賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス) (10/15～10/31) 2,132 秋季特別展 『目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚』 (10/23～12/15) 3,763								
小 計									21,412
特別展示	ロビー展示 「Picture for Peace UNOY (The United Network of Young Peacebuilders)」 (若者による平和のコンクール優秀作品展) (国際平和ミュージアム 1階ロビー) (6/1～6/30)								オープン
講演会 ほか	第8回国際平和・人権連続セミナー～平和の諸相を見る～ (国際平和ミュージアム 2階会議室) (4/23)								97
	『アジアの平和に向かって—東アジア共同体(EAC)の展望と平和研究の課題—ヨハン・ガルトゥング博士とモンテ・カセム館長の対話』								
	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室)								
	『立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること』 講師: 安斎育郎名誉館長 (5/18)								58
	学生ミュージアムスタッフ学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (6/1)								22
	『児童労働について知っていますか?～ボーンフリーアートの活動を通じて～』 講師: ジョン・デバラジ氏(ボーンフリーアートスクール創設者)								
	ジミー・ツトム・ミリキタニ回顧展関連企画 映画上映会「ミリキタニの猫」(衣笠キャンパス 充光館301号教室) (6/15)								217
	解説: 米山裕氏 (立命館大学文学部教授)、和泉真澄氏 (同志社大学グローバル地域文化学部教授)								
	NGOワークショップ『アムネスティ・インターナショナル日本「子ども兵士」について考えよう』 (7/6)								22
	講師: 佐野陽子氏 (アムネスティ・インターナショナル日本会員) (国際平和ミュージアム 2階会議室)								
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2013～電気について考えてみよう!! (国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/26)								39
	小・中学校教員対象下見学習会 (4日間・7/30、7/31、8/27、8/30)								151
	ボランティアガイド学習交流会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (9/21)								42
	『広島・長崎への原爆投下の真実と和解を求めて—日米学生平和の旅を終えて考えたこと』 講師: 藤岡淳氏 (立命館大学経済学部教授)								
	「世界報道写真展2013」公開記念講演会 『報道カメラマンの視点で見た世界の暴力と戦争の構造と平和』 講師: 会田法行氏 (フォトグラファー)								
	【京都会場】衣笠キャンパス 存心館701号教室 (10/1)								284
	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス コーラーニングハウス I 303号教室 (10/22 1日2回実施)								484
小 計									1,416

編集
後記

「巻頭つれづれ」では、国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎氏が、福島の子が生まれて初めて散歩ができたことについて執筆されています。東日本大震災後の原発事故の年に生まれた子どもたちは、被曝を恐れて散歩をする機会がありませんでした。しかし安斎氏などが被曝線量を測定して、安心して散歩できる道を科学的に明らかにして保育園に通う子どもたちが散歩をすることができるようになったことは感動的です。本来なら国や東電がすべきことですが、きちんと対策を講じていないために子どもが子どもらしく生きることができなくなっています。科学的知識を生活に活かし、これこそ真の学問のあり方ではないかと考えさせられます。

国際平和ミュージアムでは平和教育の推進をしています、たくさんのボランティアガイドの方が活躍されています。その20周年を記念した展示がありましたが、その展示や、ボランティアガイド活動日誌が紹介されています。海外の平和博物館を見ても、これだけ充実したボランティアガイドがいるところはそれほど多くありません。来年韓国で開催される予定の平和博物館国際会議で、このような活動を紹介して交流すると良いと思います。

その他オリバー・ストーン映画監督とピーター・カズニック教授の映画や著書「もうひとつのアメリカ史」の紹介もあります。アメリカン大学の学生は1995年以来ずっと立命館大学の学生と広島、長崎を訪問して、学習や交流をしています。読書の秋ですが、この本は読む価値が大いにあるでしょう。

山根和代

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展示室

第82回ミニ企画展示

●「第7回立命館附属校 平和教育実践展示」開催中

会 期：2013年10月13日(日)～12月20日(金)

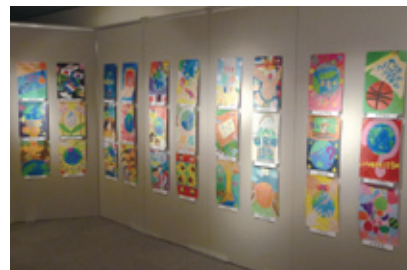
12月8日(日)～12月20日(金) 立命館慶祥中学校・高等学校（北海道江別市）

展示内容

本企画は、初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。国際平和ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の来館者の方々に、改めて平和を考えていただける機会になればという思いで開催しています。

以下は全て終了いたしました。

10月13日(日)～10月25日(金)	立命館中学校・高等学校（京都市）
10月27日(日)～11月 8日(金)	立命館宇治中学校・高等学校（宇治市）
11月10日(日)～11月21日(木)	立命館小学校（京都市）
11月23日(土)～12月 6日(金)	立命館守山中学校（滋賀県守山市）



2013年度立命館小学校の展示の様子
「子どもたちがつくる平和ポスター」

第83回ミニ企画展示

●ミュージアム・この1てん

「ぜいたく夫婦よさようなら」～『写真週報』第132号より～

会 期：2014年1月11日(土)～2月2日(日)

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム



『写真週報』第132号 1940年9月4日(発行)

第84回ミニ企画展示

●第19回京都ミュージアムロード参加企画「京都青春時代 パート2」(仮)

会 期：2014年2月8日(土)～3月30日(日)

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、京都市内博物館施設連絡協議会、京都市教育委員会

第9回ボランティアガイド養成講座受講生募集(予定)

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、今日までに100万人をこえる来館者を迎え、5,200校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示解説を中心に、展示物が語るエピソード・背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。戦後68年が経過した現在、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと思っています。

そこでボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ることを目的とした養成講座を開催いたします。

講座内容は、立命館大学国際平和ミュージアムを設立した趣意、「平和」の意義、展示に関する概要把握（一五年戦争・現代の戦争）、暴力と平和について、ガイドとしての接遇マナー、解説実習です。

ぜひ積極的にご参加ください。

開催日程（予定）：2014/2/16(日)・2/22(土)・3/1(土)・3/2(日)・3/8(土)・3/15(土)

2/16(日)・2/22(土)は1日をかけて、他の日程は3～4時間（約半日）の講習を行います。

※2014年4月～7月は、養成講座修了生を対象に実地研修も行います。詳細は当ミュージアムホームページにてご確認ください。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第21巻第2号（通巻60号） 2013年12月6日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>